

Title	ハックスリーの探求(1) : 初期小説について
Author(s)	三浦, 良邦
Citation	Osaka Literary Review. 11 P.110-P.120
Issue Date	1972-10-25
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25749">https://doi.org/10.18910/25749</a>
DOI	10.18910/25749
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# ハックスリーの探究 (I)

—初期小説について—

三 浦 良 邦

19世紀の人間観・価値観が根底から覆えされ、絶望と不安が支配した第一次大戦後の1920年代に、ハックスリーは4つの小説『クローム・イエロー』『道化踊』『くだらぬ本』『恋愛対位法』を発表している。これらの小説に於て、大戦後人間存在があらゆる価値の崩壊の中でその方向を見失ったのであるが、ハックスリーは失われた人間存在の実態があるがままに観察し、これを彼一流の鋭い知性と百科辞典的知識で懐疑的・諷刺的に描写しており、小説は時代の幻滅・絶望的な陽気・道徳的混乱の表現となっている。しかしながら彼は当時の生存の意義と目的を喪失した人間、特に知識人の生活を描きながら、もう一方では真剣に生活上拠所とする価値・思想を探し求めている。彼は人間を愛し、人間の問題を考え、人類の現在及び未来について真面目に考察しているのであり、Bowering が指摘している様に、ハックスリーは「より望ましい生活様式」「すべての人間経験(1)に基づいた人生観」を探し求めているのである。以下、彼の初期の3冊の小説を検討しながら、彼はどのように1920年代を考え描写しているか、又、彼の「すべての人間経験に基づいた人生観」への探究はどのように行われているか、を個々の小説について具体的にみてゆきたい。

## I

ハックスリーは処女作『クローム・イエロー』（1921）執筆にあたり、従来の筋があり、一青年の性格の発展についての退屈な写実小説を嫌い、伝統にとらわれない小説を描こうと試みた。この様な考えの下に書かれた

小説の構造は非常に簡単であり、実際の筋がない。作者はピーコックの小説を模倣して数人の風変わりな人物をクローム邸に集め、長期の滞在をさせ、伝統的な週末のパーティを楽しませている。人物は対照と誇張による戯画の人物であり、物語には劇的な緊張、人物間の深刻な葛藤、新しい人間性の発見もない。事件と人物間の奔放な会話のみがあるだけである。

ハックスリーは、自身は鋭い知性を持ち、博識であったが、知識に対して懐疑的である様に思われる。彼は人類の歴史と共に積み重なってきたぼう大な知識を我々はいかに生活に取り入れるべきかという問題をデニスとスコーガンという二人の知的人物によって提出している。主人公格のデニスはバラ色の人生を期待している青年詩人であるが、彼の夢は現実の人生に直面する時無残にこぼされる。彼は4才年上のアンに恋をするが、散歩の途中転んだ彼女を助ける機会があっても、背負うとよろけてしまい彼女に憐れまれたり、彼の競争相手が彼女とダンスをし、肖像画を描き、月夜に愛を語っているのを見ながら、そのどれもできない。ついに彼は彼女との恋をあきらめ、「人間は行動している時だけが幸福だ<sup>(2)</sup>」と元気づき、偽りの電報でロンドンへ引き返すが、その時彼はアンが自分に好意を持っているのに気づく。しかし時すでに遅く、彼はもう決して決定的な行動をしないと決心しながら、運命に従う。この様に彼を失敗させる原因は知識が多すぎることで、「20トンの本の思索<sup>(3)</sup>」におしつぶされて彼の自意識は彼が現実を素直に受け入れるのを妨げている。彼は思想の世界と現実の世界とを混同して行動不能に陥ち入っているのである。

One entered the world, Denis pursued, having ready-made ideas about everything. One had a philosophy and tried to make life fit into it. One should have lived first and then made one's philosophy to fit life. . . . In the world of ideas everything was clear ; in life all was obscure, embroiled.<sup>(4)</sup>

百科辞典的知識を持つ座談家のスコーガンはデニスの idealism とは対照的な realism を奉じ、科学的合理主義の社会を解説している。

An impersonal generation will take the place of Nature's hideous system. In vast state incubators, rows upon rows of gravid bottles will supply the world

with the population it requires. The family system will disappear ; society, sapped at its very base, will have to find new foundations ; and Eros, beautifully and irresponsibly free, will flit like a gay butterfly from flower to flower through a sunlit world.<sup>(5)</sup>

又、彼の「合理国家」という未来の楽園に於ては、人間は精神と気質の如何に従って幾つかの種族一大別して絶対的支配者としての理性的人種、中間層の実務にたずさわる情熱的人種、最下層の俗衆の3つに分類されている。そして特に知性や情熱を欠く俗衆は彼らが幸福であり、重要な人間であり、彼等の行為は崇高で意義深いと信じる様に科学的に条件づけられている。しかし、この様な科学の応用による機械的な社会は19世紀科学者の進歩の夢、科学の宗教に対する、物質の精神に対する勝利を表現してはいるが、この勝利はうわべだけのものである。スコーガンの科学的・合理的態度の不十分さは後の小説における程深く吟味されていないが、ある程度明確にされている。彼は人間的価値—想像・思索・自然・芸術等—を欠如した人生を運命づけられており、宗教さえも彼にとっては無意味となっている。以上の様にデニス・スコーガン共知識の為に不十分な人生を過ごしている。

他の登場人物も二人と同様満足な人生を送っていない。クローム邸の主人で邸宅の歴史を書いているヘンリーは、現実の生活から逃避し、ほとんど完全に過去の世界に住んでいる。彼にとって過去は現在以上に現実であり、消滅した過去を再創造することによってのみ彼は現実を見つけている。そして彼もまたすべての人間的接触が不要になった科学的未来を夢みている。<sup>(6)</sup> ウィンブッシュ夫人の姪のアンは魅力的な女性で、デニスの様な知識偏重からくる人生に対する障害物はなく、20年代のソフィスティケートされた若い女性として人生に何を望んでいるかをよく知っている。「私は面白いことは楽しむし、嫌いなことは避ける。ただそれだけである。」<sup>(7)</sup> しかしながら、この様な自己満足の底には彼女の人生を特徴づける退屈が暗示されている。彼女は何事にも真剣になれず、恋愛に於てもゴンボールドとデニスの両方に興味を抱き、結局二人共に去られている。アン

と鋭い対照をなしているメアリーは、デニスと同様、観念的な女性で自身の夢にフロイドの分析を適用し、自身の性の抑圧に危険を感じて行動する。そして抑圧からの解放の対象にアイヴァーを選ぶが、彼は性行為を真面目に考える人間ではなく、彼女は性の抑圧から自由になるが、彼の突然の出立によって傷つく。

以上の様に人物はすべて彼等がつかまえることができる価値を提供しない現実世界と調和することができず、現実を回避したり、失敗に終わっている。そして誇張され、諷刺されたこの様な現代知識人の不安定な生活様式は本質的には第一次大戦後の混乱の描写であり、ハックスリーが後の小説で拡大するところのものである。しかし、そこには深刻な悩み、葛藤はなく、作者の諷刺はクロームという田園の邸宅内の人物にとどまっておろ、その中で人間という動物の愚かな行為をハックスリーは冷静で傍観者の眼で眺めており、小説はハックスリーの全小説中一番愉快なものとなっている。まだ彼は探究を始めてはおらず、ただ現代知識人の実態を描写しているだけである。

## II

『道化踊』(1923)は前作と同じく第一次大戦後の不安と絶望の社会の描写であり、諷刺は依然として小説の特徴ではあるが、その対象はより明確により真面目にとらえられている。場面は架空の美しい田園より現実的な大戦後の荒廃した「7百万の別個で異なる個人」<sup>(8)</sup>を持つロンドンに移っており、ハックスリーは物語の絶望的な陽気さを通して、前作では背後に隠されていた人間存在の無意味さ、すべての物に対する無意味の感情を十分表現している。

ロンドンで無意味な生活を過ごしている有閑知識人が5人いる。自身を過大評価してはいるが、無能力な初老の画家のリピアット。彼は戦後の教養ある青年は理想を恐れている、夢を持っていないと時代の cynicism を攻撃してはいるが、青年期の理想主義と劣等感から成長していない理想主義者である。マーカプタンは18世紀文化に基づいた審美的な批評家である

が、彼の上品ぶった享樂的批評の空虚さは覆い隠すべくもない。コールマンはすべて価値を暗示するものを下落させることを人生の喜びとする悪魔主義者であり、又、彼の扇形のおごひげは救世主を模倣してはいるが、ピンでとめられた解剖用のカエルは十字架上のキリストに似ていると暴言を吐く反キリスト教主義者でもある。シアウォーターは腎臓の科学的研究にのみ夢中になって、それ以外のすべての世俗の事柄に一切無関心な生理学者である。ヴィヴァンシュ夫人は「虚無、人生に於ける本質の意味の欠如によって圧倒されるのを恐れている」<sup>(9)</sup>婦人で、彼女の鋭い損失感<sup>(9)</sup>は1920年代の時代精神を象徴している。

Less than a week later he was dead. Never again, never again : there had been a time when she could make herself cry....Never again, never again. She repeated them softly now. But she felt no tears behind her eyes. Grief doesn't kill, love doesn't kill ; but time kills everything, kills desire, kills sorrow, kills in the end the mind that feels them.... Never again, never again. Instead of crying, she laughed, laughed aloud.<sup>(10)</sup>

彼女は大战により 恋人を奪われた為に、深い絶望感に陥ちいり、他に何もすることがないので、たわむれに恋をし退屈で虚無な毎日を送っている。

彼等は戦後派の代表的な知識人であり、過去の価値より絶縁され、生存の意義を喪失した人間である。彼等は存在の意味を発見しようとしながらも、幻影を追求する結果に終っており、「恐ろしい下品で愚かな地獄で無意味な tarantella を踊っている。」<sup>(11)</sup>この様な虚無的な知識人にまじって、ガンブリルの父親とエミリーは19世紀の価値観を具現している。特に父親は戦後のロンドンの荒廃を嘆き、クリストファー・レンの模型に従ってこの大都市の復興を夢みている老建築家であり、また友人を救う為にこの貴重な模型を手放す善意の人間でもある。彼の生き方、伝統や善良さの尊重は戦後派的生き方と鋭い対照をなしている。

小説の中心は主人公ガンブリルの積極的価値への探究である。彼は学校の付属礼拝堂で牧師の説教を聞きながら、神の存在と性質について漫然と

思索している。

No, but seriously, Gumbriel reminded himself, the problem was very troublesome indeed. God as a sense of warmth about the heart, God as exultation, God as tears in the eyes, God as a rush of power or thought—that was all right. But God as truth, God as  $2+2=4$ —that wasn't so clearly all right. Was there any chance of their being the same? Were there bridges to join the two worlds?<sup>(12)</sup>

もちろん即答はなく、彼は人生の人間の諸経験と真理、人間の価値と知識との矛盾に悩み懷疑に陥り、精神的ジレンマに悩んでいる。彼は学生の場合答案を採点中教育に疑問を感じ、礼拝堂の堅い椅子から偶然「空気入りズボン」を思いつき、特許を取ってひともうけし、金もうけと情事という無責任な生き方によって懷疑を忘れようと父親のいるロンドンに出てくる。そこでは彼は出会う人々の間に希望・混乱・絶望を見出しながら、自身はコールマンの模倣をし、大きいあごひげと肩あてのはいたオーバーコートで変装して、平素の非行動的な「隠やかで憂うつな人間」からラブレー風の行動的な「完全な人間」に変身する。そして女性を誘惑し征服する為に街に飛び出す。最初彼は生理学者の妻のロージーに出会い、彼の誘惑は成功するが、2回目は異なる。第二の女性、エミリーは19世紀の道德観念を象徴している善良で清純な女性であり、極度に肉体的接触を恐れているが、「完全な人間」の男らしさと優しさにひかれ、彼の求愛に応じる。ガンブリルもまた自身の懷疑を忘れさせてくれるほど美しい女性に出会ったと思い、彼女に真剣に恋する。そして彼はエミリーと共に希望をかいまみる。

Through the silk of her shift he learned her curving side, her smooth straight back and the ridge of her spine. He stretched down, touched her feet, her knees. Under the smock he learned her warm body, lightly, slowly caressing. He knew her, his fingers, he felt, could build her up, a warm and curving statue in the darkness. He did not desire her; to desire would have been to break the enchantment. He let himself sink deeper and deeper into his dark stupor of happiness.<sup>(13)</sup>

しかし、彼はつけひげを取り、本来の「隠やかで憂うつな」自己に戻ってエミリーに会いに出かける時、偶然ヴィヴァッシュ夫人に出会い食事に誘われ断わりきれなく、彼女との約束を破る。それが原因で彼女は彼との恋愛に危惧を感じ、田舎に身を隠す。ガンブリルは失恋し、再度以前の無責任な生活に戻る。

『道化踊』はハックスリーの1920代の描写であり、しかも非常に cynical なものである。彼は19世紀的価値観が完全に覆えられた大戦後の混乱と頹廃の中で若い世代の disorientation を例証している。しかし、彼は単にそれをグロテスクな悲惨さの中で描写しているだけであり、小説は彼の戦後の世代への痛烈な非難とはなっているが、小説中には何の解決も提供されていない。主人公の戦後の世界に於てなされる価値への探究は完全な失敗に終わっている。彼は他の人々の無意味な生活や希望ある生活を眺めながら、自身は「より望ましい生活様式」を捜し求める。彼は自身の生活が不満足なものであると認識するし、又、人間の苦悩に対しても敏感である。それにもかかわらず、彼は自身の懐疑を深く思索することなく、結局は戦後のロンドンの farcical な世界にまきこまれ、押し流されて、彼の探究は無責任な生活の背後に隠れている。ハックスリーの探究はまだ始まったばかりなのである。

### III

ハックスリーの前二作は主に諷刺の手段であり、問題解決の様なものは何も提供されてはいなかった。『くだらぬ本』(1925)に於ても古いテーマは繰り返され、作者の諷刺的見方は変化してはいないが、価値への探究のより真面目な精神があり、試験的な解決が提示されている。小説は第1作と同じく田園の大邸宅でのハウス・パーティ形式に戻っているが、この作品の特徴は恋愛が重要な地位を占めていることであり、四組の男女が登場している。そして作者は有閑階級の恋愛とは言えない様などこまで行っても交らない「平行線の恋愛」を描写しながら、例によって人物の生活態度を吟味・点検している。



初老のカーダン<sup>(14)</sup>は人間として笑うことができない生活態度を提示している。彼は表面的には先駆者のスコーガンと同様「19世紀の唯物主義の単純な信仰」で育てられ、「物理学と化学によるすべてのものの究極的な説明」を信じている科学的合理主義者であるが、前者が人生からすべての喜びを合理化したのに反し、耐えるべき重荷を背負っている。彼は十分な人生を過してきたが、人生の快樂面だけを追求してきたのであり、時の経過を考慮しなかった。その結果、彼は現在では孤独な老年、病氣、死の考えにおびやかされている。この様なカーダンは精神薄弱で養母の遺産を相続しているエルヴァーに出会い、生活の安定と静謐な老年の為に彼女との結婚を決意し、巧みに彼女を誘惑する。しかし、彼女はローマ見物の途中食中毒の為に死亡し、彼の計画は失敗に終る。彼の人生は不安定な状態に戻り、彼はまた老年、死の考えに悩まされる。

パーティの女主人であるオールドウインクル夫人は金持で所有欲の強い中年の女性であり、芸術と愛に対して情熱を持っている。彼女は詩人のチェリファーを偶然救助し、彼を愛する。しかし、彼は最初から応ずる気はなく常に彼女を回避し、彼女の追跡は失敗に終る。この現実と想像の入りまじった夫人の恋は彼女の一方通行であり、状況も人間も彼女の想像の産物だったのであり、彼女は自身の妄想と主義の犠牲となっている。そして、その主義は年令を全然考慮しないものであり、夫人は「おかしな人物」から「哀感の人物」となっている。同様に小説家スリップローの愛も破綻する。彼女は自身を知的産物と考え、絶えず情緒の欠乏を感じている自意識過剰の知識人であり、恋愛によってもっと充実した人生を過そうとするが、愛を小説の題材として研究し、又、愛人のキャラミーが彼女に愛を語りながらも、自身の道を歩むから失敗するのである。

ハックスリーは二人の人物によって「望ましい生活様式」を考えている。チェリファーは詩人で兎愛好家新聞の編集長であり、第二部の「フランシス・チェリファーの自伝の断片」から登場しているが、この自伝によると彼の女性観を決定したのは、バーバラとの初恋であった。彼は14才の時彼女に出会い初恋に陥る。その後数年間彼等は別々であったが、戦後偶

然再会し、恋人同志になる。しかしながらその内に、彼は彼女の現実の性質に気づき、絹の衣服の下には、赤裸々な若い肉体が息づいているのに気づく。そして彼が自身が理想化したバーバラと現実の彼女、美への憧憬と肉体への嫌悪という矛盾に悩むうちに彼女は別の男に走ってしまう。恋愛の幻滅と退屈を経験した彼は、その後女性に真剣な興味を抱くことができない。そして彼はデニスの様な無邪気な状態からガンブリルの様な深い cynicism へと移り変わる。しかしながら、彼は人生に何の意味も見つけることが出来ないけれども、この現代社会から場所的・空間的に脱出することは不可能であるとし、現実の人生に戻ってゆく現実主義者である。

The proper course, I flatter myself, is that which I have adopted. Having sought out the heart of reality—Gog's Court, to be explicit—I have taken up my position there; and though fully aware of the nature of the reality by which I am surrounded, though deliberately keeping myself reminded of the complete imbecility of what I am doing, I yet remain heroically at my post. My whole time is passed on the switchback; all my life is one unceasing slide through nothing.<sup>(15)</sup>

キャラミーは昔は粹で経験豊かな色男であったが、現在は人生を真面目に考え、現在の生活を越えたどこかに、美と神秘とが隠されていると確信し、その探究を行いたいと願っている。しかし、彼はその意志に反して、快樂追求の毎日を送っている。「人生はすばらしい」と幸福そうなスリップローと恋愛遊戯をしながら、もう一方では、「これは愚かなことだ。俺はこの女を本当には愛していないんだ。これは時間の浪費だ。もっと他に<sup>(16)</sup>はるかに重大ななすべき事がある。」と考えている。しかし、彼は次第に冥想生活へと傾斜してゆく。「何を考えているの」とスリップローに問われ、彼は自分の手を眺めながら、次の様に述べる。

It exists as electrical charges; as chemical molecules; as living cells; as part of a moral being, the instrument of good and evil; in the physical world and in mind. And from this one goes on to ask, inevitably, what relationship exists between these different modes of being. What is there in common between life and chemistry; between good and evil and electrical charges.... It's here that the gulfs begin to open. For there isn't any connection—that one can see, at

any rate....And each one has just as much right to exist and to call itself real as every other. And you can't explain one in terms of the others....'The only hope,' he went on slowly, 'is that perhaps, if you went on thinking long enough and hard enough, you might arrive at an explanation....Perhaps it's really... all mind, all spirit. The rest is only apparent, an illusion.'<sup>(17)</sup>

この手についての考察はすでに言及したガンブリルの質問の繰り返しであるが、ガンブリルが解決を発見できず、時勢に押し流されたのに反して、キャラミーは試験的な解決を発見する。彼は今までの快樂の生活を捨て、山中で孤独な冥想生活に閉じこもり、神秘主義に入ってゆく。“But the axes chosen by the best observers have always been startlingly like one another. Gotama, Jesus and Lao-tsze, for example; they lived sufficiently far from one another in space, time and social position. But their pictures of reality resemble one another very closely.”<sup>(18)</sup> この神秘主義は『目的と手段』（1939）に於てハックスリーが発展させる最初のものであり、キャラミーは彼の中期以後の作品を予告する予言の人物である。

しかしながら、キャラミーの解決は当時のハックスリーを完全には満足させなかった。チェリファーはキャラミーを攻撃して「人間は100人中99人に対して reality であるものを、たとえそれが実際には real thing でなかつたとしても、無視することは出来ない。」<sup>(19)</sup>と主張する。これに対してキャラミーは、救いの方法は人によって様々であり、自分の方法は他の人間と違っているだけであると反論しているが、この答えは長い間ハックスリーを満足させなかった。<sup>(20)</sup>とにかく、キャラミーの神秘主義への探求は、チェリファーの安易な妥協と鋭い対照をなしており、ハックスリーは1920年代後半にロレンスの影響を受けながらも、中期以後「より望ましい生活様式」を神秘主義に求めていくのである。

## 注

- (1) *Aldous Huxley: a Study of the Major Novels*, ed. Peter Bowering (London, 1968), p.19.

- (2) *Crome Yellow* (London, 1963), p.215.
- (3) *Ibid.*, p.24.
- (4) *Ibid.*, p.24.
- (5) *Ibid.*, p.31.
- (6) *Ibid.*, p.204.
- (7) *Ibid.*, p.25.
- (8) *Antic Hay* (London, 1949), p.56.
- (9) *Aldous Huxley*, ed. Harold H. Watts (New York, 1969), p.52.
- (10) *Antic Hay*, pp.157—8.
- (11) *Three Modern Satirists: Wough, Orwell, and Huxley*, ed. Stephen J. Greenblatt (London, 1965), p.89.
- (12) *Antic Hay*, pp. 7—8.
- (13) *Ibid.*, p.156.
- (14) *Those Barren Leaves* (London, 1969), p.35.
- (15) *Ibid.*, p.108.
- (16) *Ibid.*, p.195.
- (17) *Ibid.*, pp.346—7.
- (18) *Ibid.*, p.377.
- (19) *Ibid.*, p.370.
- (20) *Proper Studies* (London, 1957), p.178.